

※参考事項

《「教祖伝の時代と大和の綿作」 — お読みいただく前に — 》

天理教の教祖中山みきの生涯を、天理教教会本部の責任において史実に基づき、信仰的立場から編述したものが『稿本天理教教祖伝』（昭和31年、1956刊）です。

また、同様に逸話集として刊行されたものが『稿本天理教教祖伝逸話篇』（昭和51年、1976刊）です。

本稿「教祖伝の時代と大和の綿作」は、『稿本天理教教祖伝』や『稿本天理教教祖伝逸話篇』にみられる教祖と綿との関わりを示す記述を、より具体的に理解したいという試みでもあります。

天理教の教祖中山みきは、寛政10年(1798)、大和国山辺郡三昧田村（現、天理市三昧田町）に生まれ、文化7年(1810)、大和国山辺郡庄屋敷村（現、天理市三島町）の中山善兵衛のもとに嫁ぎます。

天保9年(1838)、親神の啓示を受けて「月日のやしろ」（神が入り込む）となり、以後明治20年陰暦正月26日（1887年陽暦2月18日）まで、この世の真実を説き、病み苦しむ人々を救済し、人間の歩むべき道の手本としての「ひながた」を示されました。

親神の啓示を受けてからの教祖は、人々に施しを続け、中山家は母屋も売り払い、経済的に困窮する年月が長くつづきましたが、そのような中で、長男である秀司（文政4年1821～明治14年1881）が、一家の家計をやりくりするために、柴や青物を商い、綿を商うようになったと考えられます。

たまへ は、秀司と妻まつゑの第一子であり、天理教初代真柱中山真之亮の妻、2代真柱中山正善の母にあたります。

大和における綿作の状況、推移についても、誰もが検証できるように、できるだけ参考となる資料を掲げるように配慮したつもりでおります。本文とともに、註にもお目通しいただきましたら幸いです。

ご質問、ご感想、ご意見等をお聞かせいただけます場合は、下記宛にお願いいたします。

〒632-0047 奈良県天理市乙木町777番地 梅田正之 TEL：090-5042-7775

Mail：asaoki_hataraki@yahoo.co.jp